

# 千葉県における 野菜生産の現状と将来方向

雪印種苗(株)千葉研究農場 近江 公

## はじめに

千葉県は、東京という大消費地と隣接している関係で野菜供給県となっています。野菜は衆知のとおり、ほとんどのものが周年供給されていますが、一地域から年中出荷しているわけではなく、いろいろな地域からかなり細分化された作型によって、バランスよく供給されています。現在は、輸送機関の発達や野菜の鮮度保持技術などが改善されて、北海道や長野などの高冷地から、また西南暖地からも多くの野菜が関東に入ってきています。これらの地方は、関東周辺では栽培の難しい春先や真夏の暑い時期をねらって出荷してくるわけで、野菜において周年供給が可能になった一つの重要な要因となっています。しかし、例えばハウレンソウのように野菜の中には、収穫後すぐに鮮度が落ちてしまうものもあり、これらの作物については遠隔地から輸送してくることが不可能で、ほとんど都市近郊で栽培されています。(しかし、夏どりハウレンソウが一部北海道から空輸されてきております。)千葉県においても、ハウレンソウは比較的東京に近い船橋、柏、野田市が中心となっています。

このように、大消費地を近くにもつ千葉県では果たしてどのような野菜生産がなされているのか。また今後はどのような方向に進んで行くのか。断片的ではありますが一部まとめてみました。

## 1 千葉県における野菜生産の現状

千葉県における主な野菜の作付面積及び生産量について表1に示しました。昭和50年度と57年度とを比較して、ほとんどの野菜が若干ではありますが作付面積も増え、生産量も増加しています。特に、スイートコーン、ニンジン、エダマメ、キャ

ベツの作付面積はかなり増えていますが、収量的にもニンジン、キャベツは大幅に増加しています。

次に、各作物を県内の地域別にみてみますと、前述したとおり、ハウレンソウは船橋、柏、野田市など東京近辺に集中していますし、エダマメについても、これらの地域で多く栽培されています。キャベツは大部分が銚子周辺で、またトマト、キュウリ、ピーマン、メロンなど果菜類の施設を利用した栽培は、九十九里の海岸沿いに集中していますが、その他の地域でも栽培されています。ニンジンについては大きく二つの作型に分かれており、冬まきトンネル、マルチ栽培が船橋、そして夏まき冬どり栽培は八街町、富里村(印旛郡)が中心となっています。また、君津、木更津地域ではレタス、てありサイトウが多く栽培されています。

## 2 野菜生産の将来方向

品種の特性及び作型について、現在あるいは将来要望され、また発展していくと思われる事柄について2,3作物を挙げてみますと、まずハウレンソウにおいては、ここ数年間作付面積、生産量共に

表1 千葉県における主な野菜の作付面積と生産量の推移(千葉農水統計)

作物名	作付面積 (ha)		生産量 (t)	
	昭和50年度	昭和57年度	昭和50年度	昭和57年度
エダマメ	1,190	1,850	11,800	17,700
サイトウ	865	920	9,120	9,150
スイートコーン	2,260	3,490	23,900	37,600
サトイモ	5,110	3,770	45,300	58,000
ニンジン	2,190	3,060	60,800	106,700
トマト	1,020	1,080	59,200	65,800
カボチャ	286	259	6,220	5,520
ハウレンソウ	2,210	2,130	37,500	33,900
キャベツ	2,900	3,660	118,100	154,400
レタス	585	735*	10,400	15,600*

\*: 昭和55年度

に頭打ちの状態です。伸び悩んでいます。作型でみますと夏まきハウレンソウが絶対的数値ではまだ微々たるものですが、着実に伸びてきており、今後なおいっそう夏まき用品種は注目されていくと思われま

す。ニンジンでは、船橋周辺でトンネル、マルチによる冬まき栽培が行われていますが、どうしても不時抽苔が問題となり、抽苔の安定した品種が望まれています。しかし、現実にはクロダほど高品質・多収性の品種がみつかっていないのが現状で、抽苔しても全体で収量があがればという考えのもとに、あえてクロダを使用している農家もあるという話を聞いています。

レタスについては、ハウスあるいは大型トンネルを利用した冬どり（1～3月出荷）栽培が価格面においても注目され、伸びてきていますが、今までの半分かくらい、ちょうど大人のにぎりこぶし大の大きさで出荷する方法が、今後注目されると思われま

す。これは極早生種を使って、短期間で出荷が可能になりますのでそれだけ病害も少なく、また結球の揃い性も斬次収穫のため生育のばらつきが多少あっても問題がないなどの利点があります。また現在の400～500gクラスのレタスですと1回分の食事では食べきれない家庭がほとんどではないかと思われ、そういった意味においても、1回で1個全部を使いきることでできる200g程度のものが市場的にも人気があると思われま

ただし、これは比較的価格の高い冬どり栽培だからこそ可能で、春から秋にかけてはやはり价格的にどうしても大玉には負けるのではないかと思います。

トマトでは、現今の一般的な整枝法とは全く異なる新しい整枝方法として、千葉県農試砂地野菜研究室（匝瑳郡野栄町）の青木氏が考案された連続摘心栽培が今、注目されています。実際にこの方法で栽培された方々も、かなりの増収をあげて

**表2 エダマメ作付面積及び生産量**（昭和55年度農水省統計）

	作付面積(ha)		生産量(t)	
	全 国	14,100	全 国	118,400
1	千 葉	1,800	千 葉	18,000
2	新 潟	1,280	新 潟	10,400
3	群 馬	1,260	埼 玉	9,560
4	埼 玉	752	群 馬	7,110
5	北海道	716	青 森	5,330



人気のあるエダマメ「サッポロミドリ」

いるとのことで、今後も普及していくと思われま

### 3 エダマメの現状と今後

すが、同時にこの栽培方法に見合った品種についても望まれることになると思われま

エダマメについては、千葉県が全国で最も作付面積・生産量が多く（表2）、その大部分はハウレンソウ同様、船橋、柏、野田市など東葛飾地区に集中しています。弊社販売品種であるサッポロミドリ、ユキムスメ、美園グリーンは、県作付面積のほぼ半分を占めており、特にその中でも熟期の早いサッポロミドリに人気が集中しています。その理由は、市場の価格が6月までは比較的高いのが7月に入ると急激に出荷が増え価格が下落するため、早生系品種をいかに早出しするかが栽培の最大のポイントとなっています。船橋付近ではカブやネギなどが前作として用いられ、これらは2～3月上旬までに収穫して、その後2月中旬ころより温床（地温25～28℃）で育てた苗を移植して5月下旬から連続して出荷するという作付体系がとられています。移植栽培は、発芽の不安定さを解消する方法としては確実ではありますが、それだけ手間がかかり、労力的にみて経営規模拡大の最大の障害となっており、今後品種面からの発芽の問題解決も見逃せないものと思われま

また、前作後すぐに畑をエダマメに使用する場合、ハウレンソウなど収穫後根が土中に残っている作物では、エダマメに立枯れが起こった例があり注意が必要だと思われま